友の会便り

2019.5.7発行

 ∓ 436 -0004 掛川市八坂434-1

嵐牛俳諧資料館

伊藤鋼一郎

携带番号

090-1472-2972

Eメールアドレス

takumise@ titan.ocn.ne.jp

祝 改元 お めでとうございます

伊 藤 鋼 郎

ます。 吹きとして参加します。私にとって、この行事が笛吹きとしての最後となり 昨年の事 回の屋台運航の青年代表を務めると聞いています。わたくしも新田地区の笛 にはすでに終了していると思いますが。)出るのは十一台の祭り屋台です。 屋台を出し、 しっかり務めたいと思います。 (旧東山口村) 任八幡宮の例大祭において青年連合会長を務めた我が息子が、今 記念行事が行われます。 では改元をお祝いするため、 (皆様のところにこの便りが届くとき 令和元年五月四日 に祭り

を祈っています。 築士という立場になります。年号が新しくなり、本年度も良い年となること わたくしは全員の仕事に目を配り指導助言する立場で、建築士法では管理建 たい感謝の一年でした。我が建築設計事務所は建築士五名で仕事をしており、 平成三十年度は私の本業である建築設計事務所が大変忙しく、 大変ありが

した。

クリアーホルダーに一枚一枚広げて整理するのが便利だろうとお聞

かなりの量が想像でき困惑しているところ、

倉島さんよりA3サイズ

の書簡の整理をはじめま

加藤先生のご意見で、嵐牛の息子(洋々)

最近、

きそうです。

現在整理できたのは千通ぐらいですが、全体ではその倍くらい

細かくたたんだ状態では何かと不便でしたが、うまくい

めました。

うな年賀状のやり取りが始まったらしく、 ました。 覧表にまとめたいと考えています。 また、

(嵐牛友の会・会長)



整理中の様子

等に提供していた懐紙も沢山見つかりました。全部がホルダーに収まったら

理の懐紙やまくりも二百点ほど見つかりました。ほとんどが嵐牛、依平はじ ありそうだと想像しています。洋々の書簡が入っていた箱の中からは、未整

我が資料館がすでに所蔵している作者の作品でした。春隆が嵐牛、

依平

現在とほぼ同じサイズのハガキと、 A3サイズのクリアーホルダーに収めている洋々宛書簡 そのようなハガキも沢山見つかり 明治二十年代には現在と同じよ

目 次

[1]祝改元

おめでとう ございます

伊藤鋼一郎

[2]柿園友垣抄(14)

--拾山書簡二通-加藤定彦

[3]十九首の句碑建立と 『柿園嵐牛句集後編』 倉島利仁

[4] 『柿園嵐牛俳諧 資料集』ご案内

[5]講読・鑑賞の会 今後の予定

[6]柿園近影

柿園友垣抄(十四)— 拾山書簡二通

加藤 定彦

交流を遡ってみる。 先回と同じ新出の嵐牛宛書簡類に含まれる拾山書簡二通の紹介を兼ねて、両者の

集』所収「書簡の部」六拾山宛一通の解題を参照されたい。 なお、 拾山については「嵐牛とその仲間たち」の三五および『柿園嵐牛俳諧資料

べた。その頃、拾山は帰郷中だったらしく、郷国三河から見舞状を送り、 に嵐牛の安否を気遣っている。 の大竹家は半潰だった、と「嵐牛とその仲間たち六―四天王の一人、晴笠―」で述 嘉永七年(1854)十一月四日、遠州灘沖で発生した東海地震では、福田 (磐田市) 次のよう

霜月九日付拾山書簡

坂下手之橋々まで引とり候由、当国・尾州共二浜手ハ津波二而潰家・死人数しれず ひとつながら諸方之噂まち~~、たゞ~~当惑仕候。摂州辺ハ去る五日大津波、大 吉田よりハ余程之大損と風聞承り候まで二而、いまだ見舞二も出不ユ申。野坊等ハ身 御沙汰之段、平二御仁免可」被」下候。当国も牛久保辺までハさしたる損も無」之候条、 と之風聞二候。先八万々後音二可二申上一候。草々頓首。 Px ここに ・・・・・ - <ピータイン~ 供や。御方角ハ殊二大損之風聞、尊家ハいかゞと心痛のミ。御見舞二も推参不 レ 仕候や。御方角ハ殊二大損之風聞、尊家ハいかゞと心痛のミ。御見舞二も推参でいまっらぎる 【翻刻】 寒冷之節、

拾

Ш

霜月九日

嵐牛老雅君

ゆり直る世と見るまでの寒かな(下略)

藤家は地盤がよく、 掛川宿はほとんど崩壊焼失、城の天守閣も倒壊した。しかし、 とくに被害はなかったという―伊藤館長談 八坂(塩井川原)の伊

天保十四年(1843)、嵐牛(44才)は芭蕉の百五十回忌のとき岡崎の宝福寺まで遥々出 やなやなる利用して卓池ら師友と親しく風交し、

横雲や魚箔の外行鴨の声

池

落て迄風の離れぬ落葉かな

た。 をそれぞれ発句とする半歌仙(一折)二巻に拾山(当時茶岡と号、25才)とともに参加し

拾山は、弘化三年(1846)、卓池が亡くなると上京して梅室に師事、さらに行脚修

ともに句を寄せ、

文久三年(1863)、拾山は『明意集二編』を続刊、

これにも嵐牛は社中二十五名と

(嵐牛友の会・顧問)

後輩の支援を続けたのである。

生活を始める。拾山の第二撰集『明意集』(安政六年秋、九起序)は開庵披露の撰集 行を重ね、安政六年(1859)春(41才)、京に白鱗舎と呼ぶ草庵を構え、本格的な宗匠 挨拶状が届いたのであろう、嵐牛が送った

江山の望深かりし友人拾山、

京都に住処もとむると聞て

桃尻も居りし花の都かな(『自筆柿園句集』)

から、右の『明意集』編纂を思い立った頃のものであろう。 の賀句と社中平台・貫一・知碩・晴笠ら二十二名の各一句が収録されている。 次の書簡は同庵への言及や嵐牛と柿園社中の新作を急いで送って欲しいとの文面

むつき十五日付拾山書簡

御開庵之後八定而御風交御盛と奉二遠察一候。 可 μ 仕候。付てハ、又々入用之義御座候 間、いかまつる?~へわたり、当地二て発年(越年)、花 前二而帰京へわたり、当地ニモ 尚、書外期ニ永日一候。早々頓首。 寒甚敷、随分御自愛可」被」下候。略文御用捨、 御同庵御事、万端格別之由二承り及候。殊二余 御新作承り度、尚御社中皆様之玉句、両三句づ 厚情難」有奉二高謝一候。其後云ハ、、霜月淡路 扨、旧冬も一寸御礼申上候条、年内中ハ万々御 、、早々御しらべ御贈投、呉々も奉ニ希上一候。 【翻刻】 新年之御慶御同風、愛出度申納候。

嵐牛先生 (以下、近詠句等略) むつき十五日

した感想を承けたものであろう。 文面「万端格別」は、後妻を迎えた嵐牛の漏ら 還暦の頃、やす(植田氏の女)を後妻に迎える。 妻のこと。先妻は安政二年(1855)に亡くなり、 嘉永七年(57歳、1854)から。「同庵」は同居人、 化させ、有力な作者たちを門下に迎えるのは、 嵐牛が柿園の開庵後、月次句合の選評を本格

山 及はすられずるゆるよ 人口をいするは他ろ 女ら出るとなるころ 高路投展了一大家 うなけているべんしょ るというといったいのま しておらるまない国のある このはどういとうでん 不完在一段三至在1 あらっつつか る馬柱中等ないる でいるあるいもう 化すべるちゃん いもいいはまるるる るる人のれるとかい きまなありとひり ようつか 11年之生 ひろどう 後半部分

むつき十五日付

拾山書簡

十九首の句碑建立と『柿園嵐牛句集後編』

倉島 利仁

牛顕彰のために建てた句碑だと判断される。扇、松通、三湖、一玉、思静、竹夫の名が連なり、平台とその門人一派が嵐れ、裏面には「明治二十年十一月築之」「平台社友」以下、松里、平坡、甫碑が建立された。碑面にには「桜見し心しづまる牡丹哉 嵐牛」の句が刻ま明治二十年十一月、掛川宿西端に位置する十九首の東光寺門前に一基の句

介したい。の中から、この句碑建立に纏わる三点の資料が見い出されたので、ここに紹の中から、この句碑建立に纏わる三点の資料が見い出されたので、ここに紹今回、洋々宛書簡の整理調査を始めたところ、平台から洋々に宛てた封筒

①嵐牛追悼脇起五十韻

十湖、洋々らが参加している。以下に前書と第三句までを記す。 は松里、一玉、思静、松通、三湖、一勢、半湖で、他に松夫(平台)、野風、に名を連ねた八人が脇以下を順に詠んでいる。三句以上の付句が見られるの二・二×横三十二·九糎。参加したのは執筆を含めて二十三人。句碑の裏面興行した折の作品を記録した懷紙である。やや小ぶりの懷紙(二折)で、縦十嵐牛句碑建立を記念し、句碑を建てた東光寺において脇起五十韻の連句を

明治二十年十一月六日

於十九首町東光精舎與行

賦庭追善脇起俳諧五十韻

照る中に走る光りや冬の月

嵐牛居士

松 里 (以下略

坡

焚付る竈のうへに鶏鳴て

霜に草木もさびわたる里

『柿園嵐牛句集後編』

後編』の存在は今回新たに判明した。嵐牛の句集には他にも、明治十七年一刷されたことは知られていたが、明治二十年十一月刊平台編『柿園嵐牛句集明治三十五年十二月刊十湖編『柿園嵐牛翁二十七回忌追善発句集』が出版印行された。以後も、明治二十五年八月刊佐山房永増補『嵐牛先生発句集』、二編)が残されている。そして、明治十三年三月平台序『嵐牛発句集』が刊えて水音、平台、十湖らによって選句されまとめられた二種類の草稿(初編、嵐牛の発句集には、嵐牛自身によってまとめられた自筆草稿、それを踏ま

較検討は今後の大きな課題の一つである。月知碩序『嵐牛発句拾遺』という写本が大竹晴笠家に伝えられ、それらの比

次の通り。 紙)中央及び内題(巻首)に「柿園嵐牛句集 後編」とある。一円による跋文は(本書は活版大和綴六丁、縦十八・〇×横一二・〇糎の中本。表紙(本文共)

ものをひと言しるす。にしあれば、あながちにとゞめがたくて、つひに其意にまかせて跋めく成けるは、やがてその柿のあまみしぶみの名残を味はへしらまほしき業柿園居士発句集に余れる遺吟を、いつか我社友の輩書あつめて一冊子に

明治廿年十一月

一円

③句碑建立及び『柿園嵐牛句集後編』完成を寿ぐ発句書留

は次のような平台の文章が記されている。に参加しているのは六人、発句だけに名が見られるのは八人である。巻頭に(一句重複)。作者二十四人の内、連句に参加しているのは十六人、連句のみ縦二十八・三×横二十・二糎の大本仮綴三丁で、記された発句は二十五句

しかるべしと、居士に代りて平台松夫しかいふ。らん事を祈る人々の、けふの法莚に一句を手向しは、生前の門葉にひとらずして、はた駅路の東光禅寺に一碑を建築⇒て、永く此里の俳諧盛な一小冊と成しけるは、もとよりむかしをおもひ跡を慕ふこゝろざし浅か嵐牛翁居士が発句集に余れる高調を、我社友の輩いさゝか拾ひ得て後編

せぶりの初しぐれ」の発句からも伝わってくる。 『柿園嵐牛句集後編』を編み、一方で句碑建立を企て、これらの完成を記念『柿園嵐牛句集後編』を編み、一方で句碑建立を企て、これらの完成を記念これらによれば、平台ら一派は『嵐牛発句集』に漏れた嵐牛発句を集めて

現したのか、新資料の発見を期待したい。 (嵐牛友の会・幹事補佐)一年半後にはこれらを印刷する計画が立てられていたらしい。摺物作成が実記した、二月廿七日付(明治二十二年消印)の松里からのハガキが届いており、物に出来可申、付而は御手向之玉吟秋季御作にて三月五日迄御送付被下」となお、洋々の元には、「先年柿園翁居士石碑追善俳諧、今般上木いたし摺

『柿園嵐牛俳諧資料集』ご案内

頒布価格は一部五○○○円です。伊藤鋼一郎までご連絡ください。購入希望の方は、嵐牛友の会会長



講読・鑑賞の会 今後の予定

第十九回 五月十九日(日)

午後一時三十分~四時三十分 嵐牛俳諧資料館和室 八畳十六畳

加藤定彦先生講話

時間

嵐牛門人短冊講読「島田の門人雪香宛書簡群について」

石川依平「宇津の山越」講読

第二十回 十一月十八日(日)

午後一時三十分~四時三十分 嵐牛俳諧資料館和室 八畳+六畳

台 嵐牛門人短冊講読

時間

石川依平「宇津の山越」講読 ほか

がありましたらご投稿ください。 また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりで面白いこと※ 友の会に対するご要望などをお聞かせください



紅白で 令和を祝う

いつになく遅咲きの皐月 カラーやアヤメと共に彩り良く

令和元年五月一日 撮影 事務局 伊藤英子